



Title	大阪大学総合図書館蔵 奈良絵本『岩屋』
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	日本語・日本文化. 2025, 52, p. 110-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学総合図書館蔵 奈良絵本『岩屋』

柴田芳成

【略解題】 上中下の三冊。いずれも16cm×24cm。表紙は金泥草木絵紺色表紙で、中央に朱色題簽を貼り「岩屋上（中・下）」と記す。見返しは銀箔散らし。本文料紙は楮紙。袋とじで、上冊は19丁、中冊は26丁、下冊は22丁。挿絵は上冊7図、中冊5図、下冊6図。資料番号04205581400、04205581509、04205581608。

物語は、継子物の内容を備えた公家物である。清和天皇の御代、三条堀川の中納言は白川の姫と結婚し、姫君をもうける。姫君は八歳で母を亡くし、継母を迎える。右大臣の子四位少将が姫君に通うこととなる。姫君十三歳の時、筑紫の帥となつた父に同行して太宰府へ下向するが、明石で継母は佐藤左衛門に姫君殺害を命じる。佐藤は実行するに忍びず、海中の岩に姫君を置き去りにする。姫君の失踪を知った四位少将は書写山で出家する。

（上冊）父一行は姫君を悲しみつつ、筑紫へ向かう。五日後、姫君は海士に発見され、岩屋に保護される。三年後、父は都に帰り、大納言に任じられる。関白の子二位中将が落馬の療治のために下つて伊予から都への帰途、岩屋の姫君を見つけ、都へ連れ帰る。事情を察した中将の北の方は里に帰ろうとする。中将の母北政所は姫君をこころよく思わず、四人の娘とともに嫁比べをして物笑いにしようとする。（中冊）しかし、姫君の姿形、教養、楽器の才に圧倒され、結婚を許す。その後、中将と姫君の間には若君、姫君が生まれた。袴着の儀式に呼ばれた公卿、殿上人の中に姫君の父大納言もおり、これまでの経緯が明らかとなる。大納言に離縁された継母は

姫君を呪詛しようとするが、自分が物狂いとなつて死ぬ。海士夫婦は位階、領地などを賜るが、佐藤左衛門は褒賞を辞退し、高野山で修行する。以後、中将夫婦、子どもたちも繁盛した。(下冊)

ある程度の生産数のもとで流布した本文であると考えられるため、ここに紹介する次第である。

(参考文献)

- ・『室町時代物語集』第三（井上書房、1962年）
- ・松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語（続）」「伏屋」「岩屋」「一本菊」外）（『斯道文庫論集』五（1966年））
- ・同「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』三省堂、1982年）
- ・金光桂子「いはやものがたり」解題（新天理図書館善本叢書「奈良絵本集」五、八木書店、2019年）
- ・大阪大谷大学蔵本は、国文学研究資料館の国書データベースでデジタル画像が公開されている。
- ※本書の閲覧・撮影・掲載にあたり、大阪大学総合図書館にご高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

【本文】（翻刻にあたつて、漢字は通行の字体とし、私に読点を付した）

清和天皇の御時、三条ほり川に中納言ありすゑのきやうと申人をはしける、家とみさかへ給ひ、何事に付てもど

ほしき事なけれは、よろつ御心にまかせ給ひけり、あふたの御かとのみや白川のひめ君と申に御心をよせ、おりくうかゝひ給へとも、なひくけしきもおはしまさてあかしくらし給ふ所に、御心さしのかくもふかゝりしかは、しほやくうらの夕けぶり、そ」(1才) よふく風にうちなひき給ふ、たひかさなりぬれは、人しりて雲のうへ人まとももてなしかしつき奉る、ふうふの中のならひにて、程なく宮御くわいにんまし／＼ければ、わか御所へうつし参らせて、ほり川のみやとぞ申ける、月日かさなるまゝに、御さんのひもたいらかなり、あたりもかゝやく程のひめ君にてそおはします、中納言有かたき事におほしめし、いつきかしつき給ふ事かきりなし」(1ウ) 絵1」(2才) 此姫君八の御年、三月十五日のあかつきより、はゝみや風の御心ちとて、やまふのゆかにふさせ給ふ、したいにおもらせ給て、おなしき十九日のあかつき、つゐにはかなく成給ふ、御年二十八、おしかるへき御よはひかな、しゃうしむしやうのおきてとは申なから、中納言の御心の内、をしはかられてあはれなり、御跡のいとまなみさま／＼にとりおこなひたまふ、御かたみには、「ひめ君を御」(2ウ) らんして、御袖をしほ

り給ふ、御ゆかりの人く、さて有へき御事ならねはとすゝめ給て、きたのかたをそむかへさせ給ふ、此ひめ君に一あねなる御むすめをもち給へり、わかひめ君、人のひめ君もへたでなくおろかにおもふましきとてむかへ給ひけり、扱こそ北の御かたもめやすくもてなし給へは、中納言よにうれしくそおほしめしける、北のかたいらせ給ふ日より、にしのたいをしつ」(3才) らひて、みやはらのひめ君をそおき参らせ給ふゆへに、たいのひめ君とぞ申ける、明暮ははゝみやの御事のみおほしめし、わされたまはて御本そんの御前にてねんふつ申給ふ、中納言はかくていつとなくおはし侍りける事をかなしみ給けり、扱程ちかくおはしける右大臣殿の御子に四ゐの少将と申人、かのひめ君の御事をほのきゝ給ひて、めのとをかたらひて、中納言殿にしか」(3ウ) しか申されければ、りやうしやうをそし給ける、其程にたいの君十三の御年、つくしのそつに成給ふ、大きいふのたいにうけられけるうへは、大きいふへくたり給ふ、北の御方おやこ、たいのひめ君をもくし給ふへきよしきこえければ、四ゐの少将、めのとにの給ひけるは、ちんせいまど道、なみのうへおほつかなく侍れば、たいの君をはみ

やここにとゝめ給へかし、とても御やくそくの事なれはと申」（4才）されければ、中納言おほせけるは、たさいふへくたすへきにはあらねとも、たいの君はゝにわかれて、いつとなく露おもけなる有さま、いつかはおもひをはらすへき、しのひかねたる袖のうへ、ほしあへぬさまの心を、いつなくさむへしともおほえねは、ひきくして、うら／＼をしま／＼とき見せ奉り、されば、北のかたおやこをも、たいの君の御ときくし奉る事なれは、かなふましきよしの」（4ウ）給へは、少将ちからおよはす、扱都立てよとへつき給ふ、少将もよとまでくたり給ひて、やう／＼申されけれども、かなはすして、すてにともつなときて御舟いたしければ、少将は見をくり給ひて、なく／＼みやこへかへり給ふ」（5才）絵2〔（5ウ）扱そつ殿くたり給ふほどに、ゑうち、かんさきのゆうくんともおぼえとのへそ参ける、そつ殿おほせけるは、われよりもたいの君の舟をもてなせと有ければ、ゆうくんとも参て、いまやうなどおもしろくうたひすましければ、たいの君の御舟より、れうら金きんかすかすそたひにける、にしの宮なんくうのおきをこきすきて、つくしへとをり給ふ、そつ殿ははりまのこくし

にておはし」（6才）ければ、もくたいはあかしにて御まうけをかまへけり、七日の御とうりう有けり、比は三月十二日、なにおふあかしの月なれは、色ある袖にややとりける、ひかるけんしの大しやうの、すまよりあかしのうらつたひ、よせくるなみの露ことに、くたけて月そやとりける、松ふく風、なみのをと、みきはのちとり声すく、あまのつり舟かすかにて、かのゆきひらの中納言、もしほたれつゝ」（6ウ）となかめしも、いまにしられてあはれなり、あまのたくもの夕けふり、さながらかすみにまかひつゝ、うすゝみのゑににたり、しよしやの山、ひろさはよりもきよけなる、ゆふくんとも参けるを、たいの君の御舟をもてなせと有ければ、かの御舟にのりうつり、くわんさつの袖をひるかへして、さま／＼きよくをもよほしけり」（7才）絵3〔（7ウ）扱七日にも成ければ、御出とすすむれば、其時、北のかた、さとうさへもんさたいゑをめしての給ふやう、わか心にうらみあり、此事かなゆる物なれば、いひきこえんと有ければ、さたいゑ、かりきぬのそてをかきあはせ申やう、せんきまんきのかたきの中、大はんしやくをくたきて入道なりとも、いかでかおほせをそむき申へきといひけれ

は、北の方、此よしき」しめし、打ゑませ給ひ」（8才）
 て、此事ゆめ／＼人にしらすな、心のうちのうらみとい
 ふこと、われも人もひとりつゝもちたるひめそかし、わ
 かひめ君をはそむけつゝ、たいの君をのみもてなし給ふ
 こそ、世にほいなくおほゆれ、すゑの世までもおもひや
 られ、いかにもしてたいの君をぬすみいたして、うみ
 へしつめよ、よろこひには三三くをなんちか心にまかす
 へしとの給へは、さたいゑ、やすき」（8ウ）ほどの御
 事と申、さらは夕さりぬすみいたし参らせんと申さため
 けり」（9才）絵4」（9ウ）北のかた、うれしけに打ゑ
 みてかへり給ぬ、扱はりまのかみ、けつかうに御ゆとの
 をこしらへて、たいの君を入奉る、其時、まゝはゝ、よ
 き事とおもひ、われも御ゆとのへ参らんと有ければ、た
 いの君の御ときにいらせ給へとぞ有ける、色々のさか
 な、へいし一具もたせて御ゆへ入て、めのと、かいしや
 く、そのほかの女はうたちにいたるまで、よく／＼さけ
 をしい給ひしかは、北の御方かやうによくもてな」（10
 才）し給ふと、けうに入て、せんこもしらすゑいにけ
 り、さてたいの君、御ゆにおりさせ給ひてあからんとし
 給へは、まゝはゝ、いまちとゝの給ひて、ひかへ／＼よ

く／＼くたひらかし参らせて、御ゆよりあけ参らせ給ひ
 けり、扱あかつきに、はや御出と有ければ、をの／＼御
 舟にめしぬ、さるほどに、さとうさへもん、夜ふけて小
 舟にのりうつりて、人みなしつまりて、たいの君の御
 舟にのりうつり、わか舟をはせかいに」（10ウ）つなぎ
 て、御舟にのりてやかたの内を見れば、はゝみやの御め
 い日にて有ければ、らいかうのあみたのゑさう一ふくか
 け奉りて、せうかうし給ひて、ひめ君はほんそんの御前
 にそまします、うらやまふきの十三に、もよきのうち
 き、こきくれなゐはかまをき、御手にはみなすいしや
 うのしゆすをもちながら、御ゆにくたひれさせ給ひて
 つくゑによりかゝり、せんこもしらすやとりたまひけ
 り」（11才）絵5」（11ウ）さとうさゑもん、ともし火を
 うちけして、やはらさしよりて、なつかしけにかきいた
 き奉り、扱おのれか舟にのりうつり、はるかのおきへそ
 こきいたす、さどうさへもん、おもひけるは、かくのこ
 とくぬすみ出し奉りぬ、おとろかし申てりんしゆうをそ
 すすめ申さんとおもひける、十八日の月くまもなかりけ
 るに、御すかたを見奉れば、よそなからきゝおよひ申せ
 しよりも、あないつくしの御すかたやとお」（12才）も

ふに、御いたはしさかきりなくして、うみへも入奉らす
して、わか身をくはんしおもひける、われおとこの身な
らすは、かゝるうきめをはよも見しと、あさましくおほ
えて、たへこかれかなしみけり、いかさまにも、おとろ
かし奉りてりんしうをすゝめ申さんとおもひて、やう
くにおとろかし申せは、ひめ君うちおとろきて、あた
りを見給へは、めしつる御舟にはあらすして、あやしき
小舟にのり給」（12ウ）ひ、御そはにおとこ一人なきゐ
たり、こはいかにゆめかうつゝかとおほへす、扱おとこ
申やう、われはこれ、まゝはゝの御方にさとうさへもん
と申もの也、何の御とかはしりまいらせねとも、うみへ
しつめ奉れとおほせをかうふりて候程に、これまで御と
も申て候、いまは御りんしうにむかはせ給へは、御さい
この御ねんふつや候へきと申ければ、ひめ君、此よしき
こしめし、これは何ゆへの事そや、夢かや、さらによ
つゝとも」（13オ）おほへすとて、みなそこにうちふし
給ふ、わかせしとかは何こそ、をかせるつみもおほえ
すとて、もたへこかれ給へとも、そのかひさらになかり
けり、しばらく有て、ひめ君、御なみたをおさへての給
ひけるは、扱もなむち、われをやかてもうしなはで、り

んしうをもすゝめつること返々もうれしけれ、おなし
くは、いましはらく、われにいとまをゑさせよ、われ、
はゝみやにおぐれ奉りしより、まい日おこ」（13ウ）た
らす、くわんをんきやうを三十三くわんよみ奉るか、け
ふはゆにくたひれて、いまたよます、御きやうよみおは
らは、うみにしつめよとおほせ有て、御きやうをそあそ
はしける、扱三十三くわんよみおはらせ給ひて、御ゑか
うの御ことはそたつとき、十一くはんの御きやうは、此
世におはしますちゝ御せん、けんせあんおんこしやうせ
んしよとのため、十一くはんの御きやうは、らいせに
ましますはゝみや」（14オ）の御ため、たとへならくの
そこにしつみ給ふとも、此御きやうのくりきによりて、
ちゝはゝわれく一はちすの身となし給へ、いま十一く
はんの御きやうは十あく五きやくのものをもしやうほん
れんたいにやとし給へ、一ふつしやうとへむかへとり給
へとふしおかみて、さとうさへもんにの給ふやう、わか
心におもひのこす事有、いま一度ちゝを見参らせはやと
おもふ也、又むまれおちしより十三にな」（14ウ）るま
ていたきそたてたりしめのとを見たくおもへとも、みん
といふともよも見せし、みへんといふともかいあらし、

よく／＼物をあんするに、とかくおもふもつみふかし、とく／＼うみへしつめよと、かきくとき給ひて、ついたちあかり、はかまのそはたかくあけ、しやうそくのおひつよくしめ、きぬのそてをちかへてくひにかけ、ふなはたにたちあかり、さいこの十ねんとなへつゝ、いまや／＼と待給ふ」（15才）絵6」（15ウ）さたいゑ、此御有さまをみて、上らうの御心ほといかめしき物はなし、下らうならはかなはぬまでもたすけよとこそ有へきに、おほしめしきりたる御心の内のいとをしさよ、われははら／＼に六人、子をもちたり、かれらを見る時はいつれを見れともあかすおもふに、まして、御ちゝそつ殿、此ひめ君一人もち給ひて、玉のことくにおもひてこれまでくそくし参らせ給ふに、かきけすやうにうしなひたまはゝ、さ」（16才）こそなけきたまはんと、かねておもふそかなしき、させるおやこのかたきにてもおはしまさぬに、花のやう^(マツ)となるひめ君を、さうなくうみへ入奉らん事のかなしさよとて、おつるなみたはせきあへす、ひめ君はいまや／＼とそ待たまふ、月のひかりに御きやうをうちあけ／＼よませ給ふ、なにしおふあかしのうらの月なれども、こよひはなみたにかきくもり、こしちへ

帰るかりかねに、あはれふみをもことつてまほし」（16ウ）くそおほしめしける、松ふく風のをと、いそうつなみ、さよちとりと声をくらへてなきこかれゆく程に、あはちのゑしまのいそへそゆられける、其時さたいゑ、うみの中をみれば、大なるいわほあり、うれしくおもひて、ひめ君に申やう、御なこりおしくは候へとも、此岩のうへてともかくも身つからならせ給へと、かきいたき奉り、なさけなくしておきて、さたいゑは舟にのりてこきかへりけり、ひ」（17才）ひめ君は岩の上にすてられて、天にあふきちにふし、たへこかれたまひける、はるかになみちをへたてゝも、なきかなしみ給ふ御声は、かすかにきこえけり、さたいゑか心のうちもたとへんかたもなかりけり」（17ウ）絵7」（18才）なく／＼さしかへる舟のかいのしつくも、おつるなみたもあらそひて、袖はしとゝにぬれにけり、さるほどに、あかしにはひめ君のうみへ入たまひぬとて、あはてさはきければ、そつ殿、いそきひめ君の御舟にのりうつりて、やかたの内を御らんすれば、ふすまのどこもあたゝかに、たゞいままでおはしけるとおほえたり、御めのと、そのほかの女はうたち、手ことに火をともしておめきさけふこ

ゑく、たと」(18ウ) 「んかたもなかりけり、つゐに見えさせ給はねば、はりまのかみ、やかて百よちやうのあみをおろして、そのあたりをひかせらるれとも、御しかしはなかりけり、そつ殿、あまりのかなしさにおほしめしけるは、四ゐの少将よとまでしたひきたり、さまくとゝめまほしく申されつるか、もし此人ぬすみても有るやらんとて、いそきみやこへ人をものほせ給へは、きゝ給ひて、おとろきさはき、ほいなき」(19オ) 「事におほしめし、みどりのたふさをきり給ひて、御年二十五にて出家し給ふ、いまたあひ見ぬ北の御かたゆへに、花のたもとをこきすみそめに御身をやつし、はりまのしよしやへそくたり給ふ、ためしすぐなき事にそ申ける」

(19ウ) 上冊終わり

さるほどに、あかしにはひめ君の御めのと、そのほかの女はうたち、あまたもととりをきりたまふ、そつ殿も御くしおろしたくはおほしけれとも、君に御いとま申さずしてはいかゝ有へし、そのうへうさのみやのちよくしをたまはり、かたくわたくしにはからひかたしとて、すみそめの御けさをはたにかけさせ給ひて、ひとへにほたいにおもむき給ふか、さて有へきにあらされは、な」

(1オ) くなくつくしへくたり給ふ、扱ひめ君は岩の上に五日までそおはしける、一日もいきておはしますへきにあらされとも、こくうに声ありて、われたちそひてまほるなりとの給ふ、五日の程はたゞゆめのことくにそありける、中くかくて物をおもふもつみふかし、みちくるしほにひかれて、うみへ入なんとおほしけれは、はゞみやの御声にて、いのちをうしないたまふへからす、いましはしまち」(1ウ) 給へ、よるひる、われたちそひてまもるなりとありければ、さてはらいせにおはしますはゞ御せんにてわたらせ」(2オ) 給ふかや、いかにしてか、いのちなからべきやらん、とくとくはゞのおはします所へむかへとり給へと、とかくなみたはせきあへす」(2ウ) さるほどに、あま人はしほのひるまをうかゝひて、あさりしにこそ出にけるが、岩の上を見けれは、ゑにかける女はうのふせいしたる人のおはしけれは、あまこれをみて、こはいかに、たゞ人にてはあらし、てんにんのやうかうか、又はりうによのあそひたまふか、かゝる人をはいまたみすとおもひ、ふねさしよせてつくるとまほりける、ひめ君、かゝる物は見なれたまはねは、おそろしや、人にてはなきやらん、たゞい」

(3才) まわれをうしなふへきかと、よくく見給へは、人のかたちなりければ、人をなつかしくおほして、さめくとなき給へは、あま人、見奉り、舟をこきよせて申やう、いかなる人にておはしませは、かゝる岩の上にはたゞひとりゐ給ふそと申ければ、ひめ君、これはみやこの物なるか、舟よりすてられて有との給へは、あま人、まことにすてられてましまさは、いとをしく候なり、われらかすむ所へいらせ」(3ウ) 給ふへきかと申ければ、うれしくこそとの給へは、あま人、かきいたき舟にのせ奉り、みきはへこきよせ、舟よりあからせ申、いわやの内へ入まいらせけり」(4才) 絵1」(4ウ) さるほどに、そつ殿はたさいふへつかせ給ひて後、北の御かた、風の心ちにならせ給ふか、物ぐるはしく成て、きやうしやたちをしやうし、いのらせ給ふ、三日と申には、きたの御かた、きちやうの内よりとひいて、きやうしやのすすをおつとりふりならし、みやうわうの御まへにかゝる時、きやうしやに物かたりせんためにきたるらん、何ものそ、なのれくとせめられて、其時、北のかた、はつかしけにてきぬひきかつ」(5才) きて、さめくとなき給ふ、やゝしはらく有て、かくこそかたりたまふ、我

はこれ、みやこのもの也、ちんせいのきやうしやに見ゆへからす、されども、あまりのくるしさにたゞいま参たり、あふたの御かとの二のみやは、我なり、たいの君にははゞなり、さるにても、おんあひのみちこそかなしけれ、たいの君八にてしやうしむしやうのならひのかなしは、かゝるいとをしきひめをすておきて、めいとにおも」(5ウ) むく事のかなしさよとおもひ、しねんはしやはにとゞまりしゆへに、ほたいの道にもいらすして、けうやうすれともわうしやうせず、つくれるつみもなければ、ちこくへもおちすして、いた中うのたひにたゞよひぬ、朝夕まもるかひもなく、何のとかによりて、あかしのうらにてたいの君をはうみへしつめるそや、あらくほいなや、うらめしやとの給ひて、あらはつかしとて、さめくとなき給ひて」(6才) 後、しつまり給ふ、かやうになのり給へとも、たれ心をしつめて、さる事とはさとるへきならねは、北の御方はもとの心に成給ふ、扱も岩やのあま人は、ひめ君を朝夕かしつき奉りけり、おつとのあま、つりをしに出ぬる時は、女のあま御ときをし、又めのあま、みるめ、あをのりとりに出る時は、おつとのあま御ときをして、あけぬくれぬとせし程

に、はや四年にそ成にける、扱そつ殿は三とせも過け」
 (6ウ) れは、みやこへのほり給ひけり、たかさこのお
 きをすぐるに、海の中に大なるはたそ見えける、四ゐの
 少将の入道、ちかきさとのきそう、かうそうをしやうし
 て、しやうこんたうちやうをこしらへ、ほけきやう八ち
 くのめうもんをかゝれける、その見せはたと申ける、
 たいの君をは此あたりへこそしつめ申つらんとおほしめ
 し、うみの中へ御ほうらくしたまへり、なみにもぬるゝ
 袖の上、よそのたもとまでもしほり」(7オ) かねたる
 ふせいなり、そつ殿の御けうやうはことはりなり、少将
 入道は、いまたあひみぬ北のかたゆへにさまをかへて、
 かくつとめられけるこそ返々も有かたき事なれ、扱そつ
 殿に御いとまこひてかへり給ふ、つくしへの御時は、の
 ほりの時とこそちきり給ひしに、けふはなれなん後、又
 いつともちきらねは、恋しき人のかたみのいとま、たか
 ひにおもひ給ふもことはりなり、「(7ウ) おつるなみた
 もかいのしつくもわきかねて、いまをかきりとおもへ
 は、りんゑまうしうのふる里を、此度なかへたりぬ
 とおほしけることあはれなり、「(8オ) 絵2」(8ウ)
 少将入道は、しよしやへかへり給ふ、そつ殿は、よとへ

そつき給ふ、みやこへのほりなは、君に御いとま申て、
 しゆつけせんとおほしめしけるに、みかとしゆつけさせ
 しとて、うさのみやのちよくし、ことゆへなくとけられ
 たるよろこひに、大納言になされける、したい申給へと
 も、りんけんなれはちからなし、よろこひの中にもなを
 しの袖をそほりたまふ、かゝりける折ふし、くはんは
 く殿の御子に「一ゐ」(9オ) の中将殿と申人、八月十五
 夜のくまなき月に、さふらひあまためしくして、かもの
 かはらに出てこまくらへをしてあそひたまふか、いかゝ
 はし給ひけん、中将殿、むまよりおちてひたりのかひな
 をそんし給ふ、そのれうちのために、いよの国へそくた
 り給ふ、いく程もなくよくならせ給ひて、みやこへのほ
 り給ふか、ひんこの国うしまとのみなとより、はりまの
 国むろのとまりにつき給ふ、月のて」(9ウ) しほの夕
 なきに、あちのむらとりわたるなり、くれゆくまゝに風
 あらくなりて、しどろもどろになみたちて、五そうのと
 もふねは、こなたへかたな(マ)へわかれけり、心ほそさはか
 きりなし、ろかいもかちもかなはすして、風にまかせて
 ゆられゆくか、とある嶋へふきつくる、其時、舟のつな
 をとり、なきさへおりさせ給ふ、中将殿、うらのものに

とはせ給ふ、扱も此浦を何といふそととい給ふ、うら人
申けるは、「」（10才）れはあかしのうらにて候と申、
扱はきこゆるめいしよなり、いさいかいたうのおもひて
に、いさやあそはんとて、御めのと子の六ゐのしん、さ
こんのしやうけんきよさた、うきやうの大ふつねはる、
さきやうの大ふこれはる、御いとこのからはしの少将
殿、中山の中納言殿、此人たちを引くして、みきわのか
たをめぐりあそひたまふ、なにおふいそのそなれ松、心
ありけるけしきかな、さる程に、あまの岩やに」（10ウ）
おほくてはよしなとして、二三人あかり給ふ、さこんの
しやうけん、六ゐのしんをひきくして、中将殿、あまの
岩屋を御らんし給ふ、岩やの内をのそきたまふに、くち
にはもくつをしき、見るもいふせき有さま也、袖ももす
そもそもなかりけるやぶれころもをこしの程にぬきかけて、
おどこのあまはせなをあふり、女のあまはあとにゐてつ
らす、いたしきもなきそとよ、すかこもをかきにかこ
して、ゐ中のけらうのすみかは、いぬのふしとこことな
い、とまやのとこのむつくけさよ、つちをふしとのはに

ふのこやのいふせさよ、いさや又、上のいわやにひそかにあかりたまふ、六ゐのしんはかへりぬ、中将殿とさ」んしやうけんも岩やの内を御らんするに、おもひもよらす、さもゆふなるひめ君の、御年の」（11ウ）程十五六ほどゝ見えたるか、かみのかゝりよりはしめて、すかた有さま見めのいつくしさよ、あひきやうかゝやくほとのけしきにて、ひとり火をあかしておはしける、こはいかにとおもひ、むねうちさはきて、しのひやかにさしよりて、くわしく見給へは、ひめ君は、人の見るともおもひもかけぬけしきにて、いとやさしき御声にて、

おもひきや身をあま人になしはてゝかるもをひ」

（12オ）とりあかすへしとは

とうちなかめ給ひて、なみたをはらゝとなかさせ給ふを御らんして、御心もそらにあこかれてのそき給ふに、岩やの内には、北とにしは岩やなり、南の方にさほをつりてうらやまふきの十三に、うへかさねのうちき、くれなゐのはかまそへてかけられたり」（12ウ）絵3」（13オ）中将殿、ふしきの事にそおほしけり、さこんのしやうけん申やう、よく御らんし候かと申せは、よく見侍るなり、かゝるふしき、よもあらしとうち見るよりも、何

となく此人のゆかしくおもふとの給へは、さこんのしやうけん申けるやうは、かゝる人里とをき所には、まゑんのものゝすむやらん、御かへりあれと申せは、さらはとてかへらせ給ふ、道すからも、さこんのしやうけんとてをてにとりて」(13ウ) ふしきの事かなとてのたまひける、扱その夜のあくるおそしと、あま人をめしてかつきて見せよとの給へは、きのふのなみのなこりしつまで、かなふましきと申せは、おほせをそむくはふしきの事とて、あまをみきはの松にいましめつけて、扱中しやうの給ふやう、たとひかかる物なりとも、岩やのひめをいま一め見はやとの給ひて、又岩やへさし入て見給へは、きのふ御らんせしは」(14オ) ものゝかすならす、けさはなをまさりて、うつくしさとも中くいふはかりもなかりけり、いかさまにもよしある人と見えて、岩やの内にうたをかきて有、そのうたの中に、

はかなしや 身をあま人と なしはてゝ よせくるなみに そてぬれて ほしこそわふれ わかなみたあはれととへる 人もたゝ なきさのとまや 風あれて ゆめもむすはぬ あかしかた かよふちどりの」(14ウ) ともよふも わか身のうへに しら

なみのよせきてかへる あまをふね こかれて物や おもふらん すみあらしたる あしかきのまちかからねは ふみたにも ふきつたへさる うら風の そなたのそらも なつかしや 身はむもれ木と なりはてゝ 人しれぬ身そ かなしけれとそ月はさしなみはよせきてたゞく戸をあるしかほにもあくるしのゝめ」(15オ)

たらちをにいかてしらせんうらにきてちいろのそこをのかれたる身を

かゝる身をうらのあま人なかりせはなみのそここをくちやはてなん

月かけはあまの岩屋にやとれともむかしにかはるな

かめなりけり

扱ひめ君はあさゐのとこに、なにこゝろなくやとらせ給ふを、中将殿さしよりて、おきさせ給へと有しかは、ひめ君うちおとろ」(15ウ) き、御めをひらき見給へは、からおり物のかりきぬに、うすけしやうにふとまゆつくりて、あてやかかる人なれば、有しみやこの事、ふとしもおほしめしいてさせ給ふ、これはたゞゆめかやとおもひ、又きぬひきかつきふし給ふを、さほにかけたりし御

こそてとりてうちきせ参らせ、さこんのしやうけん、ひきおこしおい奉り、こかねつくりの御はかせをは、中将殿みつからもたせ給ひてそかへり給ふ、風も」（16才）しつまりければ、御舟とも、ともつなをそときにけり、扱あま人をはゆるされけり、あまは、わか身のいましめられたる事をはなげかすして、岩やへおそく参事をなげきて、岩やの内へはしり入、扱もふしきの事有て、いまゝて参候はず、さこそたよりなくおほし候はんと申て見奉れは、ひめ君見え給はず、いつのならひにかた時も出させ給ふへきか、あなかなしやとてはしりまはり、もたへこかれけり、おも」（16ウ）ひのあまりに、みきはへはしりゆきて、うみのかたへむかひていふやう、たどひりうくうしやうへ御かへり有とも、うみのおもてにうき出て、いま一度おかまれさせ給へ、天人にておはしまさは、雲のうへよりやうかう有て、今一度見え給へ、此三四年か間、なしみ参らせつる御なこりかなしくこそと、もたへこかれけれども、かひもなし、さるほどに、ひめ君のおはしますやかたの内には、れうらきんしうの御ふすまひきく」（17才）せ参らせ給ひて、とかくなくさめ給へとも、たゞなくよりほかの事はなし、中将

殿おもひのあまりにや、御かほたに見せさせ給はす、かほとに人にうとまれ参させては、いのちいきても何かせん、うみへ入、そこのみくつとも成なんとの給へは、ひめ君、なみたをながし、かくめしくしたまはゝ、などやおやをもくし給はぬそや、いかはかりあとにてなげき候はんとの給へは、中将殿、何とてかくさせ給ふらん、あまの」（17ウ）子にてはおはしまさぬものをとの給へは、ひめ君、なみたをながし、あまの子にあらすは、何にかかる所には住侍るへきなどの給へは、中将殿、何をかさのみおほせけるそや、御すかた世にかくられまさぬものをとおほせける」（18才）絵4」（18ウ）とかくかたらひゆくほとに、よどにつき給ふ、御むかひのくるま参けり、御ともにはさきやうの大ぶ、六ゐのしん、さこんのしやうけん、ひたのせんしそ参ける、扱ひめ君をは御ぐるまにのせ奉り、さつしき、うしかし御車をとはせ、大みやをのほりに、てんかの御しよへやりぬへけれども、それにはう大しん殿のひめ君、此三年いせんよりむかへ参らせておはしませはとほゝかりて、ひたのせんしかいゑに入せ給けり」（19才）ゑもんのかみといふさふらひの家にうつりて、わか家をはゆつり参らせ

けり、つきの日、中将殿、てむかの御しよへ参給ひけり、御はゝ、きたのまん所御けんさんあり、中将殿は、御心にうれしき事のおはしければ、わか御方へ御かへりたくそおほしめしける、まん所の給ふやう、れうちめてたく候て、やかでもとのことくにとりなをしたまふ、うれしきよとそおほせける、おの／＼かみしもの人々よろこひあひけり、扱いとま申」（19ウ）で出給へは、北のかたには中将殿いらせ給ふとて、みす、こうしあけさせ、はきのこひ、北の御方もひきつくるひ給ふ、女はうたちもよういして、いまや／＼と待給へは、中将殿、くるまをよせて、北のたいへは御めをたにも見やらせ給はすして、ひたのせんしか家へそいそかせ給ひけり、扱又つきの日、大りへ参給ひてかへらせ給ひて後は、花見のみゆきにも出たまはす、たゞこもりゐさせ給ひて、天にすまはひよくの」（20オ）とり、地にすまはれんしのえたとならんと、しやう／＼せゝはなれとちきり給ひて、たかひの御心さしふかゝりければ、かた時もなれたまはす、なみ／＼のかんたちめなんとの事ならは、あま人のむすめにくしたりとて、人／＼のゝしるへけれども、一の人の御事なれは、おそれてさたする人もなかり

けり、扱北の御かたへは、此程のあ中くたりに、しほ風にふかれ候へは、色もくろく見くるしく候程に参候はす、「い」（20ウ）かはかり御つれ／＼に御入候はん、ふるさとのかたへもおほしめしたゞせ給ひ候はんやと、文を参らせ給へは、扱はかわるならひの有なれは、ちからおよはすとて、やかて出させ給ふを、てんかとゞめ給ひて、中将殿をはふけうとそおほせけるを、北のまん所、ふけうの事は色々申なため給ひて、たた御めをかけすとも、せいしまいらせ給へしと有しかは、ふけうはとゞまり給ひけり、扱きたのまん所、四人のきんたちに」（21オ）むかひ、此事をなけかせ給ふ、四人のきんたちと申は、一人はときの女御れいけんてん、二にはちうくうのみやす所、三にはなかをかのくはんはくとのゝ北のまん所、四には内大臣殿の北の御かた、此人／＼にむかひ、はうへは中将殿の御事をなけきて物かたりし給へは、をの／＼おほせけるやうは、中将殿はきはめて物はちする人也、おもふ中をさけつれば、そのおもひにあくかれてさんりんに入ぬれば、おやもともに」（21ウ）身をいたづらになす事あり、たゞおもふよしにて、われらか中原中のひめ君をよひよせて、かたくなはしき事を見い

たしてわらはんに、などかははちてすてさるへきとの給
へは、けにもしかるへしとて、めつらしからしつくり物
をつくらせてよはんとて、ほうらいの山をつくらすへし
とて、ものゝ上手ともを百人あつめてつくらせらるゝ、
北の方の女はうたちに、大かくのすけのつほねと申女』
（22才） はうは、人にすくれて物わらひのわんさん人な
り、これをつかひにたつへしとて、御つかひにつかはし
給ひけり、中将殿へ申させ給ふやう、四人のきんたちの
御つかひに参りて候、さこそ御つれくにわたせ給ふ
らんとをしはかられ候、こなたさまへもおほしめしたち
候で、御あそひ候へと申せとの御つかひにて候と申され
ければ、中将殿きこしめし、それく御返事申させ給へ
とありしかは、ひ」（22ウ） め君、こはつくるひして、
いきのし^(マニ)にの給ふやう、ゑんこくのものはとうさい
もわきまへす、みやこまではのほりて候へとも、八えた
つ雲のほかは見ず、ゐ中のものゝふるまひはあさましく
侍るなり、かくて一日も候へは、中将殿の御ため、はち
かましくおほえ侍るなり、かなふましきよし申させ給へ
と有しかは、「（23才） 絵5」（23ウ） 大かくのすけ、か
へり参て此よしを申せは、ことはのつゝきはおもしろ

し、されとも声はなまりでおかしかるらん、はやこよか
し、見てわらはんとて、かさねて御つかひあり、其時、
北のまん所、たゞおもふよしにて、しろしやうそくをや
らんとて、からあやのしろき御はかまを御ちの人にもた
せて、又大かくのすけ参て申やう、きんたちのおほせ事
に、御つれくをしはかりまいらせ申に、などや中将殿
せいし参らせ給ひ」（24才） 候はぬや、何とて御したい
有へき、又、北のまん所のおほせには、何かくるしかる
へき、これにもわかき女はうあまたさふらへは、御入候
てあそはせ給へとのおほせにて候と申されければ、まこ
とにかやうにおほせ侍れば、おそれ入たる御事にて候、
はやく御返事申させ給へとありしかは、ひめ君、御返
事には、けんこうの波のをと、きんかくの御わき、かり
そめにもみゝにふるゝ事なし、はゝかり入候へとも、千
ひきのいしをうこかし」（24ウ） てと申させ給へと有し
かは、大かくのすけ、かへり参て此よしを申されけれ
ば、四人のきんたちは千ひきの石のうこかしてとは、こ
しといふ事やらん、こぶといふ事やらんとの給へは、き
たのまん所、千ひきのいしをうこかしてとは、千人して
ひくともうこくましきいしなれとも、おほせのおもさに

ゆるきいつるといふ事なり、いさやまうけせんとて、けふをはれといてたちたまふ、れいけんてんは、おみなへ」(25才) しの十五に、もよきのにをひうちき、うすくれなゐのひとへに、くれなゐの三えの御はかまをめしたり、ちうくうのみやす所は、もみちかさねの十五に、ゑひそめのうちき、うすくれなゐのひとへに、これも三えの御はかまめされたり、内大臣の北の御かたは、きくにほひの十五に、うすくれなゐのうちき、むらさきのひとへに、くれなゐ三えのはかまめしたり、一人のひめ君に三人つゝの女はうたち、ゑかき、花」(25ウ) むすひ、うたの道にもこゝろへたるをあひそへたまふ、四人のひめ君の御すかたを見給ふに、たなはたひこほしのあまの川にたち出て、かさゝきのはしをわたり、しやうのはやしにあそひゐたるけしきも、わか子のすかたにはよもまさらし、いはんや、ゐ中ものゝあまの子か、はやこよかし、見てわらはんとの給ふうちに、御くるまちかつきぬ、よく見てわらはんかために、御くるまをはちうもんへそよせ給ふ、扱みす」(26才) のまへを、せうてんはるかにねらすへしとさためたまふ、おひ女はうとも、あまのむすめを見んとて、めもはなさすまほりける、中

将の御ため、はちかましくそおほえける、中將殿は、いかゝおほつかなさに、いたしきのしたにかくれぬてきておはしけり」(26ウ) 中冊終わり

さるほどに、御ともにはさこんのしやうけん、ひたのせんしなり、御くるまよせて、はるかにとをくそかしこまる、くるまよせのつまとのまへには、たかとうたいふたつかきたてゝ、女はう三人ゐたりける、三人ながらしそくをふとくして、手ことにもちたれば、日中よりもあきらかなり、三人の女はうさしよりて、したすたれかきのけて、はやくおりさせ給へと申せは、御返事もし給はず、をの／＼さゝやきけ」(1才) るは、これを見て、よもおりさせ給はし、おりかねさせ給ふもことはりなりとそさゝやきける、やう／＼ほどありて、ひめ君、おりさせ給ふ、御かいしやくもなかりければ、身つからきぬのつまをひきあはせ、御くしかきなて御きぬの上にゆりなかし、御はかまのそそをひきなをし、もやのみすの前をせうてんはるかにあゆみ給ふ、御すかたは、さみたれにはみかさまさるむつたのもとのあやめ、まごものうへこすよりも」(1ウ) 猶たをやかにそいらせ給ふ、ひすいのかんさしは御きぬのすそにあまりければ、いたの上

にひかれて、風にしたかふあをやきの、うちなひくより
も猶もたをやかなり、あはれ、ゑにかきて此御すかたを
あまねく人に見せはやな、いかなるゑしかうつすとも、
筆もおよぶへしともおほえす、扱御しとねの上にゐさせ
給ひて、うちそはみたる御すかた、たとへんかたそなか
りけり、ひめ君見まはし給へは、にしきの」（2才）し
とねあやのきちやう、さんこのゆか、たまのすたれ、一
人の御所なれば、さすかに心にくゝもおもひしに、わ
かちゝのにしのたいをしつらひて、われをすませ給ひし
よりも、はるかにおとりてそ見えにける、これを見給ふ
につけても、むかし恋しき御すかた、つゝむにたへさる
御なみた、みたれかみをつたひきて、おさふる袖にあま
るを、さらぬていにもてなして、見まはしたまふ御めの
うち、あくまで」（2ウ）けたかくおはしける、北のま
ん所、これを御らんして、しろきしやうそくは中／＼け
たかく侍れは、わか四人のきんたちは、しまのあま人の
子かとよ、中将の人に見あはすれば、けすしさかきりも
なし、さるほどに、ほうらいのつくり物をとりいたして
見給へは、一め二め御らんして、又とも見給はす、日比
見るわれたにも、見れとも／＼あくる事なし、めもかけ

させたまはねは、物いひ、こゑはおかしかるらん、物い
わせてき」（3才）かんとて、れいけんてんの給ひけれ
は、かやうの物はめつらしからぬ物なれとも、見せ参ら
せんためにとおほせければ、ひめ君よく／＼御らんし
て、はつかしながら、此ほうらいのいはれをあら／＼か
たり候へし、あつきうてんと申は、雲の上のみやこな
り、ほうらい山と申はかいちうのみやこなり、せんにん
きたりてくすりをとらんとせし程に、六つにくつれて、
その一つ、なんせんふしうにあり、かのほうらいに一つ
の家」（3ウ）有、ちやうせいてんとなつく、前にはふ
らうもん有也、ふらうもんのさかひに一のいちあり、ち
やうあんかせいのいちといふ、此市に一のくるま有、ふ
らうふしのくすりをしてくるまなり、此くるまの内につ
ほ有、こくうかつほと申は此心なり、ほうらいのその内
には、こくうかつほはなきやらんとおほせ有ければ、し
る人もなけれど、御返事にもおよはすして、あきれは
てゝそまほりみたり、扱其後、かのつほのふしん」（4
才）をたつね給ふへき人ものなりけるに、たうのみねり
やうそんこそ、なをゑたるかくしやうなりときこしめ
し、とはれけるに、こくうかつほねのいはれ、ひめ君の

御ことはにすこしもちかはさりけるにや、これをふしきと申されける、此ひめ君の物の給ふこはいろは、きんのしらへ、かれうひんのこゑ、れうのきんするよりも、猶おもしろきこはいろなり、其後、れいけんてん、御ことを参らせてあそはせと有し」(4ウ) かは、ひめ君、いそにしくるゝ松風の、つまをときたためぬひゝきをは、みゝにぶれしかとも、かやうの事はおもひもよらぬと有しけは、中将いたしきの下にて、かほとの事とおもひなは、なとかひわ、ことひかすとも、九ほんれんたいのうへまでも、はなるましきものをとそおほしめしけり、れいけんてん、はや／＼あそはせと、御てをりやうかくのものとにそへられければ、そむきかたきおほせかなとて、御ひさの上にことを」(5オ) かきのせて、ことちをたてなをし、二七^(タ)日のをかきあわせ給へは、心ことはもおよはれず、おもしろかりけり」(5ウ) 絵1」(6オ) さて又、御ひわ参らせて、あそはせと有しかは、ひめ君、おもひより候はすとて、しきりにしたい有しかとも、御ことのやうにあそはせとて、御ひわをとりなをへは、そむきかたきおほせかなとて、御ひわをとりなをして、はんしきにねをとりなをし、かきならし給ひた

り、はちをとはりやうせん、たくほく、こうの三きよくを二へんまでそひき給ふ、雲の上までもすみのほり、天人もあるくたり」(6ウ) ふつしんもめてたまふらん、これをきく人々は、そゝろに袖をしほりけり、わらはんとおもひし人々も、何事もうちわすれ、かんにたへてそゐたりける、扱あかつきかたにもなりしかは、御むかひのくるままいりければ、をの／＼なこりをおしみて、夜もほの／＼と明しかは、御くるまにそめされける、四人のきんたちは、くるまよせまで出させ給ひて、これまでこそ参て候へとのたまへは、おほせこそ」(7オ) おそれ入でさふらぶ、はゝかりなから参て、おの／＼御けんさんこそ、かへす／＼うれしく候へとその給ひける、扱御くるまやりいたしたれは、のこるおもかけいつかはわするへきと、めん／＼にの給ひける、其後、北のまん所、四人のきんたちにの給ひけるは、ふしきの事かな、過にし比、ほり川の大納言のみやはらのひめこそ、てかき、うたよみ、ひわことのしやうすなり、十の比より、しよけいのみなもとをき」(7ウ) はめ給ふ、さらにはんふともおほえすとて、をの／＼心をかけられしか、中将もこはんとせしかとも、四ゐの少将にこされてちから

およはす、扱大納言たさいふへくたりし時、あかしのうらにて、日本にすきたるひめなりとて、りうくうしやうへとられて、扱こそ四ゐの少将は、はりまのしよしやにおこなひすまして有けるそや、そのひめ君も、いまのあま人のむすめにはよもまさし、かた時見」(8才)るわれらさへ、見れとも／＼あかす、中将のわりなくおもふもことはりなり、右大臣のひめ君も、中将の見ねはよめならす、たどへあま人のむすめにも、あれわか子の見るこそよめなれとて、かゝる人又世の中によもあらしとて、やかて御よめにもちゐたまはんとの給ひて、さへもんのすけ、ひやうゑのすけ、うへもんのつほねと申上らう女はう三人、女はうたち六人、うへわらは三人」(8ウ)はしたもの五人、くるま三りやうにのせてやりつゝけられける、御ふみには、これ見くるしく候へとも、としころめしつかひたるものともにて候、はちさせ給はてめしつかはせ給へとて、おくらせ給ふこそ、ありかたけれ」(9才)「絵2」(9ウ)其時、中将はわか子にすへし、むまれたらんは、いまは何をかつゝませ給ふへき、ゐ中人にてはわたらせ給はす、いはんやあま人の子にてもおはせず、ありのまゝにかたり給へとの給へは、ひめ君、さめ／＼どう

ちなき給ひて、あまのそゝるにこひしさにこそ、たものひるまもなけれは、おやにてましまさねは、御心にかゝらぬもことほりなり、わらはかためにはおやなれは、わするゝひまも候はすと、猶もかやうにその給ひける、さる程」(10才)に、岩やのあまは、ひめ君のわかれをかなしみて、女はかみをそりて、ひめ君御ほたいをそとふらひける、ふうふとともにしやうあるものをころさすして、みるめ、あをのり、わかめ、おこのり、ひしきもをとりて、世をわたりけるか、ひめ君の御ためにとて、山に入ては花をたをり、たにゝおりては水をむすひ、あやしきあま人なれとも、なきけ有ものにそ有ける、有時、中将殿は、かも、やはたへしんめをそひかせ給ふを」(10ウ)何事の御いのりそときくに、姫君たゞならすわたらせ給ふか、はや五月にならせ給ふ、その御いのりとそきこえける、其後、てんかよりおほせ有けるは、あま人のむすめにくしたれば、中将はわか子にてはなし、むまれたらん子はわか子にすへし、むまれたらん時、はゝのひさにおかすして、いたきとりてこれへわたすへしと有ければ、ほとなく月日かさなりて、御さんたいらかなり、あたりもかゝやくほど」(11才)のわか君

にておはしける、大納言のつほね、きぬの袖につゝみ
てうけ奉り、てんかの御所へそ参給ふ」（11ウ）絵3
（12オ）てんか、大に御よろこひ有て、二条にしのとう
ゐんにわたらせ給ふ、中なこん殿、御めのとにめされけ
り、御車には、大なこんのつほね、いたき参らせてのり
給ふ、御たちはきには、きよけなるさふらひ百よにんそ
しゆこし奉る、けたかくそおほゆる、御うふゆは、てん
かの御所にてひかせ給ふ、御ちの人には、ちくせんのせ
んしか女なり、かくて月日をおくらせ給ふほとに、又ひ
め君をそまふけ給ふ、月」（12ウ）日にせきもりすへさ
れは、程なくわか君七さい、ひめ君五さいの八月十日の
御はかまきのおやには、ちさうゐんのきやうふきやう参
給ふ、一の人の御子のはかまきなれは、大しん、くきや
う、てんしやう人もれす参給ふほとに、ほり川の大納言
殿も参給ひけり、その時、ひめ君、二人のきんたちを御
ひさの上におき参らせての給ひけるは、くきやうの御中
に八はんめにわたらせ給ふを三たひ」（13オ）つゝおか
み奉り給へと、なみたをなかしてをしへ奉れば、きやう
ふきやうのみや、御はかまきせ参らせて、くきやうの中
へいらせ給ひて、八はんめにをはしますそつの大納言殿

を三たひおかげ参らせて、御しとねにかへり給へは、人
くふしきのおもひをなす所に、てんか、そつ殿をは何
のゆへにおかみ給ふそと、きんたちにとい参らせ給へ
は、きんたちの給ふやうは、はゝ御せんのおかみ奉れと
お」（13ウ）ほせ候との給へは、てんか、さこんのしや
うけんをめされて、此いわれをれん中へたつね申させ給
へは、れんちうよりおほせいたさるゝやうを、さこんの
しやうけん、かしこまつて袖をかきあはせてうけたまは
りぬ」（14オ）絵4（14ウ）ひめ君、御なみたをおさへ
ておほせらるゝやうは、われはにんけんにむまれ、五人
のおやをもちたり、そのゆへは、まことのちゝはそつの
大納言殿なり、はゝはあふたのみかとの二のみや、やし
なひをやは岩やのあま人ふうふなり、又さとうさへもん
なり、われ十三のとし、ちちそつ殿つくしへ御くたりの
時、あかしのうらにて、まゝはゝ御せんのおほせにより
て、うみへしつめられるを、さとうさへ」（15オ）も
ん、つかひにて有しか、なさけ有て、たちまちうみへし
つめすして、おきの岩の上にすておきたりしに、岩やの
あま、あさりしに出けるか見つけ、くしてわかすみか
にかへり、四年があひた、いつきかしつきておきたり

けるか、ふしきにふるさとのみやこへのほりぬ、やかもちゝそつ殿にかくと申たく侍りしかとも、さためてまゝはゝ御せんをうらみさせ給ひなん、さあらん時」(15ウ)は、われふけうのうちに入へしとおもひて、いまゝてはかくとも申さぬなり、わか此わか君、ひめ君、いつも見れともあく事なし、ましてや、わかちゝのたゝひとりもち給ひて、ゆくへなくなりてのちは、さこそおほしなげくらん、おひたるおやにさのみ物をおもはせ申さんも、あまりにつみふかしとおもふ也、めてたくけふしも、ちゝのけんさんに参らせん事こそ、返々もうれしく候へと御」(16才)なみたとともにおほせいたされければ、此よしきこしめし、てんかをはじめ奉りて、子をもち給ふも、もち給はぬも、一とうにこゑをあけてなきたまふ、右大臣殿も、扱も此人ゆへにわか子は世をいとひ、身をすてゝほうしになりし、かなしさよと、ふしまろひてそなき給ふ、そつ殿は、これは夢かやうつゝかやとて、なをしの袖をしほり給ひける、其程に日も暮ぬれは、をのく」(16ウ)かへり給ひぬ、もやのみすのまへを大納言殿とをらせ給ふを、しゃうし入参らせて、たいの君にあひ參らせ給ふ、扱過にしかたの御事とも、つ

やつや御物かたりし給ひて、うれしきにも、たかひの御なみたせきあへたまはす」(17才)絵5」(17ウ)いとまをこふて、大納言殿もかへらせ給ひぬ、扱北のかたおほせけるは、人／＼はとくかへり給ふに、などやおそくかへらせ給ふそと有しかは、されは人のなけきはすゑもとをらす、身にあまりて、いまはよろこひとなりけるそや、北のかた、身にあまりての御よろこひはいかなる事やらんととひ給ふ時、扱何のとかによりて、たいの君をは、あかしのうらにてうみへしつめ給ふそや、とかなき事は」(18才)よも候はし、とく／＼うけたまはり候へしとせめ給へとも、とかくの事もきこえたまはて、あきれはてたるけしきなり、大納言の給ふやう、われもわろきものゝおやなれば、さこそは心くるしとおほしつらん、けに神ならぬ身はくちおしきことそかし、それ女はすかたはほさつにして、心はとくしやのことしと、ほとけのとき給ひしもことはりなかし、かゝるむくつけき人をは、かた時見る事」(18ウ)もかなふまし、いそき御くるま参らせよとて、ふるさとへそおくり給ふ、北のかた、ふるさとへはゆかすして、すくにいなりにそこもり給ふ、きせい申さるるこそはおそろしけれ、なむいなり

五しやの大明神、ねかわくは、たいの君にさんひやうのやまふをさつけてたひ給へと、七日こもりてのろひけれども、神はひかことをうけたまはねは、のろはるゝたいの君はつゝかもなくして、此まゝはゝ、日比、人」(19才)に物をおもはせし、そのむくひつもりてや、心物くるはしく成て、御しやうそくもひきやふりすてゝ、はたかにてくるひまはれは、ふるさとの人／＼も、かゝるむくつけきものをはかなふましとて、よする人もなかりければ、年四十二と申はるの比、つゐにくるひしにゝそ成給ふ、扱てんかは岩やのあま人をめしのほせ、てんかの御所へはむくはんにては参らぬ事なれば、さふらひのしやうそくをき」(19ウ)せて、大ゆかまでめされて、ひめ君御けんさんましくて、かす／＼のたから物をたまはり、あかしのうら、あはちしまをゑいたいあんとの御状を、てんか殿よりたまはり、あま人はよろこひてかへりけり」(20才)「絵6」(20ウ)人になさけをかけぬれは、人にもなさけをかけらるゝそかし、扱そつ殿は、さとうさへもんをめして、たいの君をたすけおきぬるおんしゃうに、いよの国をたまはりぬ、さたいゑかしこまつて申やう、かたしけなきおほせにて候へとも、すでにわ

れよはひかたふき候へは、かゝるうき世をぶりすてゝ、こせをねかい申候はんど、御いとまを申こひ、かうや山に参おこなひすましけるを、ほめぬ人こそなかりけり、「ひ」(21才)め君の御はゝみやの御時の人人、此よしをきゝ、かなたこなたより、われも／＼と参あひて、みやつかへ奉る、さる程に、中将殿のひめ君、十三にて女御に参給ふ、若君は中将殿と申て、大しやうかけ給へり、さきの中将殿、後にはくはんはくにそ成給へは、たいの君もきたのまん所とて、めてたくさかへ給ふ事、かきりもなし、人のためによき人は、すゑひさしくはんしやうする事」(21ウ)うたかひなし、人のためにわろきものは、のちの世までもあさましく、ちこくにおつる事うたかひなし、しひの心をもつ人は、神ほとけもしゆこし給ひ、けんせあんおん、こしやうせんしよとそ」(22才)
下冊終わり



上 4



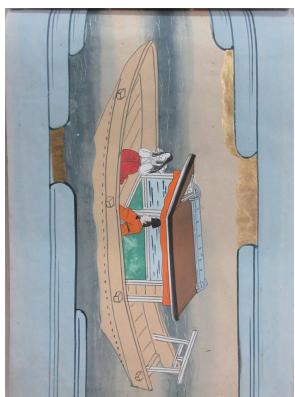
上 1



上 5



上 2



上 6



上 3



中3



上7



中4



中1



中5



中2

下 4



下 1



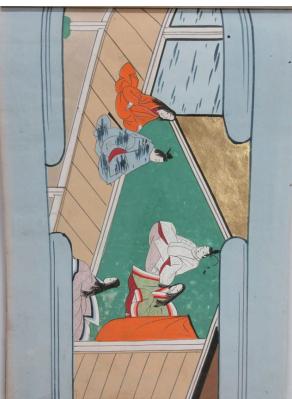
下 5



下 2



下 6



下 3



【付記・反省の弁】

本誌前号掲載の拙稿「大坂町奉行・曲淵甲斐守のお裁き」は、『明和雑記』に収録された曲淵甲斐守の関わった裁判話を取り上げました。脱稿後、曲淵甲斐守の裁判譚として『石曲秘事談』「石曲秘談抄」「石曲比事」などの裁判説話集のあることを確認しました（書名の石は

石河土佐守政武、曲は曲淵）。その中には、捨て子裁判（石曲秘事談第十二）、平野郷の後家火付け裁判（同前第十四）など、曲淵甲斐守の大坂町奉行在籍時の事例がありますが、それらを扱うことができませんでした。さらには、『明和雑記』についても、祖本にあたる『つれく飛日記』や、相互に関係をもつ『明和雑錄』『談笈』等があることを見落としていました。前稿は曲淵甲斐守の裁判話を当時の法令に照らして個別に読み、紹介したものであり、諸資料によってその内容が大きく変わるものではありませんが、結果的にみて、そもそも調査・準備不足で書いてしまったことは否めず、汗顏のいたり、反省しきりです。

【参考資料】

- ・ 日野龍夫「カリフオルニア大学バークレー分校蔵『明和雑錄』紹介」『混沌』六号、昭和55年3月
- ・ 多治比郁夫「大阪の隨筆(一)~(内)」（続日本隨筆大成第7巻～第十二巻、吉川弘文館、昭和55年6月～56年4月）
- ・ 垣口弥生子、坂本恭子、佐藤敏江、平野翠、多治比郁夫「翻刻『石曲秘事談』（後半十巻）」（大阪府立図書館紀要）三十二、平成8年3月
- ・ 「石曲秘談抄」（京都大学蔵大惣本稀書集成）第七卷 雜話I所収、解題・山本秀樹、臨川書店、平成8年7月